

青年期における肯定的自己評価の高まりと社会適応との関連 ―「おたく」に着目して―

Improvement of Affirmative Self-evaluation in Young Adult and Relation to Social
Adjustment: Examination of “Otaku”

児童学研究科 児童学専攻 1000-080620 横山真季

問題と目的

大学生を中心とする青年期は、学業や対人関係、職業選択などの様々なストレスイベントを経験する機会も多く、発達のにも自己への内省が高まる時期である（及川・坂本，2007）。青年期は、急激な身体的変化によって始まる。この身体的変化には大きな個人差があり、明らかな他者との差異は、青年の目を自己に向けさせる。また、身体的変化により、自己評価が不安定となり、自己の価値を確認するために他者の視線を気にしたり、何かについて他者と比較したりしてしまう（高坂，2008）。自己評価は、「スポーツが得意だ」、「明るいところが好きだ」、「飽きっぽいところが嫌い」といった自分自身に対する評価のことで、勉強やスポーツ、対人関係など、自己の様々な側面に対して行われる。青年期は自己への嫌悪感、自己否定感が高まる時期といわれ、自己に対する否定的な感情は、時には青年に深い悩みをもたらし、生きづらさを感じさせるのである。肯定的な自己評価は、「人間関係」が密接に関連している。自己評価や自尊心が高い人は、達成動機が高く、他者との関係が良好で、社会生活において様々な領域において適応的である（中里・松井・中村，2004）。溝上（1997，1998）は、肯定的自己評価を「人との関係が基盤となっている自己のさまざまな側面に対して行われる自分自身に対する評価である」とし、肯定的自己評価の研究から、自己評価を支える規定要因として、“人間関係”の多いことを示唆した。自己評価を規定する要因の研究は、集団全体で自己評価に規定している要因が何であるかを探るもので、自己評価を支える要因がその個人にしか判断できないという観点を考慮するものではなかった。肯定性の高い自己評価タイプは人間関係が良好で、“人との関係性”を必ず基盤としながら自己評価を高めていることを明らかにした。肯定的自己評価が達成されているものは、人間関係が良く、欲求行動が高くなることを示し、充実感を高く感じるようになり、自己同一性が確立される（水間，1998：水間，2000）。本研究では、肯定的自己評価が高くなることによって、欲求行動が高くなることが、「おたく」のサブカルチャーといわれる何かのジャンルに没頭し（菊池，2000）、こだわりを持ち、その対象に対して時間やお金を極端なほど集中的に消費する（野村総合研究所オタク市場予測チーム，2005）ことと関連しているのではないかと考えた。

「おたく」という言葉は、中森（1989）が青少年たちの特異な行動様式や外見を称して命名したものである。浅羽（1991）は、サブカルチャーといわれる何かのジャンルにマニアックに没頭

し、同好の仲間と距離をとったつきあいを持つ以外は、「一般的コミュニケーションが苦手で自閉的で根の暗い少年たちへの蔑称を含んだ呼び名」と、している。中里ら（2004）は、1980 年代に「新人類」と呼ばれた青年たちは、社会的無関心を深め、大人が理解し難い価値観をもつようになる。そして「オタク」という、アニメなど自分の好きなこと以外無関心という青年を生み出す。「オタク」は、対人関係の弱さゆえに、他人と距離を置きたがり、自分が傷つくのを恐れるがゆえに他人と濃密な関係を持ちたがらない、といっている。菊池（2000）は、「おたく」という概念を、社会的ステレオタイプの一つと捉え、1998 年から 1999 年にかけて調査を行い、「おたく」態度がコミュニケーションスキルの欠如に必ずしも繋がらないことを示した。趣味活動に強くコミットし、熱中している人ほど、少なくとも社会的スキルは低下しない傾向があったことが明らかになった。社会的スキルの欠如を「おたく」態度と結びつけるステレオタイプは、趣味活動が活発だという側面では当てはまらないことを示した。本研究では、「おたく」が、こだわりある対象に対して時間やお金を極端なほど集中的に消費する（野村総合研究所オタク市場予測チーム、2005）ことが、根本（2009）の「好きなことへ熱中すること、ゲームをすること、カラオケに行くことなどは日常的に行うストレス対処行動である」と考えた。

現代ではストレス社会といわれている。このストレスフルな社会環境の中でいかに健康維持・増進につとめていくかが現代の課題の一つだと言える。この課題について考える際に、よくとりあげられるのが「ストレス対処（＝ストレスコーピング）」の問題である。ストレスコーピングとは「ある個人のもつ適応資源をこえる、あるいは、この能力の負担になるような諸要請を、克服・低減・容認しようとする認知的行動的努力」と定義されている。つまり、ストレスコーピングとは、内的（個人的）な、そして外的（環境的）な問題に対する心理的努力であり、問題、障害、欲求不満などをうまく適応できるようにする心的過程なのである（三好、2006）。コーピングは「能力や技能を使い果たしてしまうと判断され、自分の力ではどうすることもできないとみなされるような、特定の環境からの強制と自分自身の内部からの強制の双方を、あるいはいずれか一方を、適切に処理し統制していこうとしてなされる、絶えず変化していく認定的努力と行動による努力」と前田ら（1998）は定義し、ストレスフルな出来事が生じると、まず自分のまわりで何かがおこり、それに対して何ができるかを吟味する認知的努力がおこり、それがコーピングのプロセスに影響をすると考えた。平賀（2003）によると、最近の心理的ストレス研究では、ストレスラー以外のストレス反応に影響を与える媒介要因のひとつとして、ストレスラーに対するコーピング（対処行動）が重要視され、学校、職場など、多種多様な領域でコーピングと適応との関連が検討されている。一般に、ストレスラーに対して働きかけたり、解決を図ろうとする積極的なコーピングは適応に有効であり、ストレスラーから逃避したり、距離をとったりするといった回避的なコーピングは不適応につながるということが報告されている。特に、大学生は他の世代に比べ、

比較的健康的な年齢層であるが、近年では彼らにメンタルヘルスの問題が指摘されている。原因としては、大学進学に伴う環境の変化や生活時間の変化などが指摘されており、将来的にストレスへの耐性を強化する意味でも、ストレスコーピングの基礎的知見を重ねることは意義深いといっている。本研究では、コーピングを用いることで、特定の人が、特定のストレスの状況のもとで、特定の種類の出来事に対する適応の結果を導いていく（前田・関・旭・小林・野田・長崎・伊佐地、1998）ことを、社会適応であると考え。以上より、本研究の目的の1つは、肯定的自己評価が高くなることで、「おたく」嗜好も高くなることを検討していく。2つ目は、「おたく」嗜好が高くなることが、ストレスコーピングに及ぼす影響について明らかにすることである。

研究1「予備調査」

目的

予備調査の目的の1つは、菊池ら（2007）が「おたくの捉え直しから研究に取り掛かるべきであった」と著していたため、「おたく」に対する具体的なイメージを明らかにすることである。2つめは、青年期にある大学生が社会適応をしているのかを明らかにすることである。

方法

今回は、T県内にある私立の四年制大学に通うS女子大学の1年生～4年生の女子大学生の計76名（平均値＝19.8歳、標準偏差＝1.01）を対象とし、質問紙調査を行った。

結果と考察

今回、1つ目の目的である「おたく」に対する具体的なイメージを明らかにするために、「おたく」を引きこもりと比較をした。これは筆者が卒業論文にて行った研究の中で、「あなたが思う『おたく』像を自由に書いて下さい」と大学生に訊ねたところ、「おたく」と引きこもりが類似している、「おたく」は引きこもりではないのか、「おたく」は引きこもっているという回答が多く得られ、「おたく」に対する具体的なイメージが得られなかったからである。「おたく」のみに焦点をあててイメージを訊ねると、家に閉じこもっている、外出をあまりしないなど、閉じこもっているイメージや、他人と関わらない、話が合わないなどコミュニケーションスキルが欠如しているのではないかと推測できるようなイメージが多く得られた。「おたく」を引きこもりと比較した結果、「おたく」は、1つあるいは不特定多数のものに対して興味を持っている、熱中している、没入していることが明らかになった。野村総合研究所オタク市場予測チーム（2005）の定義と菊池（2000）と同様の結果が得られた。友達や仲間がいるので、人と関わろうとしている、などというコミュニケーションスキルの欠如がみられないという結果が得られた。外に出る、外の世界に出ていけるなどといった外向的、活動的、エネルギーでアクティブであるということが分かった。これらの結果から、菊池（2000）の「おたく」態度がコミュニケーションスキルの欠如に必ずしも繋がらないことと同じ結果が得られた。社会適応については、「同年齢の男女との付き合い

い」については、「どちらかといえば良い」、「少し良い」、「とても良い」と 75 人中 42 人 (56%) が回答していた。「情緒的・金銭的に自立している」については、「自立していない」、「どちらかといえば自立していない」、「あまり自立していない」と 76 人中 61 人 (80.3%) が回答していた。

「相手の考えが自分と違って、頭から拒否せず相手の考えを尊重できる」については、「どちらかといえばできる」、「できる」、「少しできる」と 74 人中 43 人 (58.1%) が回答していた。同年齢の男女との付き合いは良好であり、相手の考えが自分と違って、頭から拒否せず相手の考えを尊重できることができるが、情緒的・金銭的に自立はしていないことが分かった。これらの発達課題を達成することにより、青年期から成人へと向かっていくが、上記の結果から分かるように、今回の調査では社会的な自立、心理的な自立をまだ確立してはいなかった。

「おたく」嗜好尺度（自作の尺度）の作成

予備調査で得られた結果および野村総合研究所オタク市場予測チーム (2005) から、「おたく」嗜好尺度を作成した。主因子法・バリマックス回転を行った結果、3 因子 22 項目を抽出した。因子負荷量.30 以上を示した項目について解釈した。因子名については、一番高く負荷した項目を考慮して、第 1 因子を「趣味への熱中」因子 ($\alpha = .75$)、第 2 因子を「社会的内向」因子 ($\alpha = .75$)、第 3 因子を「自己顕示欲求」($\alpha = .70$) と命名した。

研究 2 「本調査」

目的

本調査の目的の 1 つは、菊池ら (2007) のおたく尺度をモデルに、予備調査で行った質問紙調査から大学生を対象とした「おたく」嗜好尺度の作成を行い、因子構造、信頼性を検証することである。3 つ目は、肯定的自己評価が高くなることによって、「おたく」嗜好も高くなるのではないかということを検討することである。3 つ目は、「おたく」嗜好が高くなることが、ストレスコーピングに及ぼす影響について明らかにすることである。

方法

今回は、Y 県内にある公立の四年制大学に通う T 大学生、T 県内にある私立の四年制大学に通う W 女子大学生の計 309 名を対象に質問紙調査を実施した。公立 T 大学では 1 年生～4 年生の大学生は 258 名 (男性 83 名、女性 175 名、平均年齢=18.77、標準偏差=1.11) で、私立 W 女子大学では 3 年生～4 年生の女子大学生 51 名 (平均年齢=20.35、標準偏差=.56) であった。

結果と考察

肯定的自己評価尺度と「おたく」嗜好尺度の分析

本研究の目的である、肯定的自己評価が高くなることによって、「おたく」嗜好が高くなるのではないかということを明らかにするために一元配置分散分析を行った。自己評価尺度の「肯定性次元における個人基準」、「肯定性次元における社会基準」、「否定性次元における社会基準」、「否

定性次元における個人基準」の4因子について、それぞれ高群・中群・低群に分類し、「おたく」嗜好尺度の「趣味への熱中」、「社会的内向」、「自己顕示欲求」の3因子と平均値の比較を行なった。その結果、自己評価尺度の「肯定性次元における個人基準」における「私は、現在の自分が幸せだと思います」などの得点が高い人は、趣味に対して何らかのこだわりが高くなり、他者と話すことが苦手ではなく、世間から注目されるのが好きであることが明らかになった。自分を高く評価している場合に、「おたく」傾向が高くなることがわかった。他者との関わりよりも、自分のことを大切にすることが「おたく」の特徴であることが示された。自己評価尺度の「肯定性次元における社会基準」における「私は、色々な点で人より優れていると感謝しています」などの得点が高い人は、他者と話すことが苦手ではなく、世間から注目されたいと思っている。自分のことを他者と比較して、優れていると考えている人は、趣味には熱中してはいないが、他者と行動し、目立ちたがりやであることがわかった。しかし、こだわりがないという点では、「おたく」とは言えないのではないかと考えた。「おたく」は、こだわりがある対象を持ち、その対象に対して深い造詣をもっている、と筆者は考えているからである。自己評価尺度の「肯定性次元における社会基準」の高群・中群・低群では「おたく」を明らかにできないことが分かった。自己評価尺度の「否定性次元における社会基準」における「何かにつけ自分は役に立たない人間だと思います」などの得点が高い人は、他者と話すことを苦手とし、世間から注目されることが苦手であることが分かった。しかし、「趣味への熱中」では、平均値に違いがみられなかった。上記で述べたように、自己評価尺度の「否定性次元における社会基準」の高群・中群・低群では、「おたく」を明らかにすることはできないことが示された。自己評価尺度の「否定性次元における個人基準」における「私は、時々自分が嫌になる時があります」などの得点の高群・中群・低群では、「おたく」嗜好の「趣味への熱中」、「社会的内向」、「自己顕示欲求」の3因子の平均値の比較を行った結果、いずれも有意な差はみられなかった。よって、自己評価尺度の「否定性次元における個人基準」では、「おたく」の特徴を明らかにできないことが示された。以上の分析から、自己評価尺度の「肯定性次元における個人基準」の高群・中群・低群のみ、「おたく」嗜好に違いがあることが明らかになった。現在の自分に満足しており、幸せと感じ、肯定的に自分を捉えているので、好きなことに熱中できる「おたく」嗜好が高くなったと考えられる。

「おたく」嗜好がコーピング方略へ及ぼす影響

「おたく」嗜好が社会適応性をみるコーピング方略尺度にどのように影響をしているのかを、「おたく」嗜好尺度の「趣味への熱中」、「社会的内向」、「自己顕示欲求」の3因子をそれぞれ高群・中群・低群に分類し、詳しく分析を行った。「おたく」嗜好尺度の「趣味への熱中」因子における「趣味に対して何らかのこだわりがある」などの得点が高い人は、コーピング方略尺度の「積極的な問題解決」の様々な解決方法を試みているが、解決できないときは、他の事について考え

ることで逃避し、感情を押さえたことが明らかになった。「他者からの援助」や「諦め」に関しては、趣味に対してのこだわりが高群・中群・低群でも差が見られなかった。趣味に対するこだわりがあり、そのことについて深い知識を持っていると考えられる「おたく」嗜好の人は、自分の抱えている問題に対して、何か解決策はないかと調べたり、考えたり、計画を立てたりはするが、うまくいかないと、このことは重要でないと考えて、趣味に没頭し、感情を抑制し、最悪の状況を予想して心の準備をしている。その際、他者に援助を求めることは、「おたく」嗜好尺度の高群・中群・低群と同様に少ししかできないことが明らかになった。「おたく」嗜好尺度の「社会的内向」因子における「他人と話すことが苦手である」などの得点が高い人は、人に助けてと言えないことが分かった。コーピング方略尺度の「積極的な問題解決」、「逃避」、「諦め」、「行動・感情の抑制」については、群間で有意な差は見られなかった。他人と話すことが苦手であるならば、他人に助けてと言えないのは当然であると考えた。しかし、他人と話すことが苦手であるなら、物事から逃避したり、諦めたりするのではないだろうかと考えたが、「逃避」、「諦め」の得点の平均は、1.8～2.5であり、高群・中群・低群の全体でも少ししかしていないことがわかった。つまり、大学生は、積極的な問題解決を行っているわけでもなく、逃避したり、諦めたりもしないことが明らかになった。「おたく」嗜好尺度の「自己顕示欲求」因子における「世間から注目されるのが好きである」などの得点が高い人は、コーピング方略尺度の「積極的な問題解決」の様々な解決方法を試みているが、解決できない時には、他の事を考えて逃避し、他者からの援助を求めることが明らかになった。目立つことが好きな人は、困った時に他者から援助を求められることが明らかになった。「おたく」嗜好の高い人は、一人で家に閉じこもりがちになると考えられたが、そうではなく、「おたく」の中でも「自己顕示欲求」が高い人が、他者に相談できることが示された。以上の分析より、「おたく」嗜好尺度の「趣味への熱中」の得点が高い人は、問題を解決するために努力はするが、問題からは逃避し、自分の感情を抑制するが、「おたく」嗜好尺度の「自己顕示欲求」の得点が高い人は、更に他者にも相談できることが明らかになった。「おたく」嗜好にもそれぞれに特徴を持っていることが明らかになった。本研究では、肯定的自己評価が高くなることで、「おたく」嗜好も高くなるのではないかと考え検討したが、肯定的自己評価の中でも、「自分の価値基準に照らした上で、自分を受容し、自分に満足できているかを基準とした評価」である個人基準にのみ「おたく」嗜好が高くなることが明らかとなった。「おたく」嗜好が高くなることによって、コーピング方略に及ぼす影響については、「おたく」嗜好を構成する因子によって、用いるコーピング方略の組み合わせに違いがあることが分かった。特に、「おたく」嗜好尺度の「自己顕示欲求」が高くなることで、世間から注目されたいと感じ、多様なコーピング方略を用いていることが示されたことは意義深い。